

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No. 133

(2016年7月刊行)

Examination of Poverty in Northern Mozambique: A Comparison of Social and Economic Dimensions

Naoko Shinkai

Research Project: [南部アフリカにおけるインフラ整備のインパクトに関する実証研究](#)

■付加価値

過去 10 年間に於いて、サブサハラ諸国は高い経済成長を示してきた。しかし、同地域の貧困研究に関する既存文献によると、こうした経済成長が、同地域の貧困削減に貢献しているとは言いがたい。他方、これらの既存文献の多くは、消費、所得ベースの経済的計測のみに基づく貧困を検証している。貧困は多次元的であり、これらの経済的計測のみでは貧困者の真の状況を表せない可能性がある。多くの住民が自給自足農業に携わっている場合は、特にその可能性が高い。本論文では、北部モザンビークを対象に、貧困について、2003 年以降の変遷を多次元計測で検証した。また、「経済的計測による貧困」と「多次元計測による貧困」についても、主な決定要因を分析した。さらに、同地域において貧困に係る議論の争点のひとつとなっている「貧困の女性化」についても、二つの異なる計測により分析した。

■リサーチ・デザイン

まず最初に、モザンビークにおける社会経済的環境について、識字率や純就学率、また「貧困の女性化」と関連すると考えられる家族体系の検証を行った。その後、「多次元計測による貧困」については、2010 年の「人間開発報告書」(国連開発計画刊行)にも用いられている多次元貧困指数(Alkire and Foster 2009, 2011)をもとに、2003 年以降のモザンビークの農村部の貧困状態について比較検証した。また、多次元貧困指数に基づく極度の貧困のほか、耕作土地規模や食費にもとづく「最下四分位値に基づく貧困」の主な決定要因について、ロジット分析を行った。分析データとしては、貧困が著しい地域とされる北部モザンビークを対象に、JICA 研究所が 2010 年に実施した小規模農家家計調査の結果を用いた。

■主な結論 (政策的含意を含む)

分析の結果、北部モザンビークにおいては、2003 年以降、「経済的計測による貧困」については減少がみられなかった。しかし、「多次元計測による貧困」については農村部で減少がみられた。また、貧困の主な決定要因については、家族の規模がもたらす正の効果、および読み書きのできる家族構成員がもたらす負の効果は、貧困の種類を問わず、貧困の重要な決定要因であった。「貧困の女性化」については、北部モザンビークでは顕著な結果は見出せなかった。「経済的計測による貧困」と「多次元計測による貧困」の決定要因の違いは、ナカラ回廊からの距離に現れた。「経済的計測による貧困」については有意な効果をもたらさなかったものの、ナカラ回廊に近い家計ほど、「多次元計測による貧困」に陥る可能性は低いことが見出された。

これらの結果から、若年出産や予定外妊娠を減少させるリプロダクティブ・ヘルス・プログラムや初等教育の拡大やノンフォーマル教育による識字率の上昇などを更に充実させることは、これらの地域における貧困削減に貢献するといえよう。